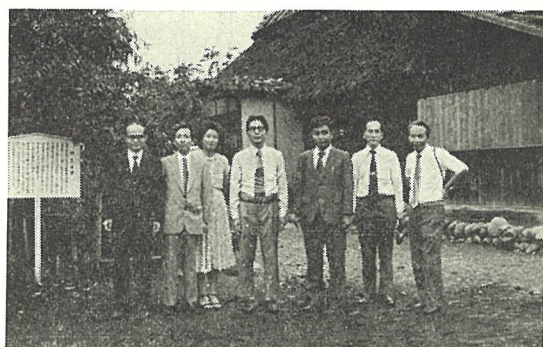


安中再訪記



新島旧宅前にて、右から 井殿牧師、諏訪・萩原・宮本、塩崎夫人、武・井上教授

宮本 栄三

(一)

同志社新島研究会主催の第一回地方講演会が新島先生ゆかりの安中と前橋で催されるといふ案内を頂いたのを機に安中の探訪を思い立った。

夏も終りに近い八月三十日、昼すぎに宇都宮を発って、大宮から高崎線に乗り換え、高崎からまた列車を乗り継いで安中駅に降り立ったのは五時すぎであった。夕方というにはまだ夏の日差しはきびしかった。安中は二度目である。十八年前の夏、新島学園に岩井先生をお訪ねして以来である。碓氷川を望む台地にあつて、かつては中仙道の主要な宿駅の一つとして繁栄したであろう安中の町は今も処々に宿場町の面影を残しており、前に来た時に較べて意外な程に変わつてはいなかった。

先ず安中教会に行く。街道からわき道にせり急坂を二三百米も登りつめたところに日差しも疎らな深い木立ちとその中に大谷石造りの会堂はあつた。大正八年に竣工した新島記念礼拝堂である。正面入口の上に大理石に彫られた新島家の根柢の家紋がはめこまれている。新島家は安中藩の祐筆職をつとめ、新島先生は天保十四年（一八四三年）二月十二日に安中藩の江戸屋敷で生れてゐるが、この安中こそ先生の父祖の地である。現存する新島家旧宅の傍に立つ「新島襄先生の碑」（昭和十六年建立）は、明治十八年に同志社神学科を出た湯浅半月の八十四歳の時の筆になるが、碑文には次のように誌るされている。

「……在米十年の苦学を竟えて明治七年の冬家に還りて老いたる父母の健在なるを見て感涙に咽ばれしも此所なりき（中略）日本内地に基督教の伝道を公然開始せられしも此所なりき又明治十一年の春男女三十人に洗礼を施して純粹なる日本人の基督教会を創立せられしも此所なりき（後略）」と。このように安中は、新島先生の家郷の地であると同時に、帰朝後最初の伝道活動をなされた記念すべき場所でもある。

(一)

この安中で新島先生を記念するものは数々ある。前記の礼拝堂、記念碑、旧宅はもちろんであるが、変わったところでは菓舗万歳堂の「新嶋最中」まである。右に引用した半月の碑文はもなかといいしよに菓子折の中にはいつている。しかしなんといつても新島先生の生ける記念碑的存在は新島学園であらう。この学園は昭和二十二年に現安中市長・湯浅正次氏によって創立された。根柢を校章とし、碓氷川を望む高台にある。その地名までがなんと新島である。小じんまりとした学校であるが、今や群馬県下の名門校といわれている。この名物校長が岩井文男先生であった。岩井さんは昨年九月に二十年余り勤めた校長を引退されて、今は学園長である。誰が言ったか知らないが、岩井さんは「下へ、下へ」と行った人」だそう。昭和五年に法学部を出て最初日銀にはいったが、帝大出が威張っているのにいや気がさして三井銀行へ。ほとんどは金勘定ばかりなのに見切りをつけて神学部に入入学として農村伝道へ。戦後同大神学部教授になり宗教部長・学生部長を歴任されたが、再び田舎町の高校へ。とにかく無欲

で威張らないお人である。今度安中に来て、この岩井さんが、重態だと言ったものだから、それ大変とばかりに、宇都宮から一緒に来た塩崎立夫(栃木ナショナル)諏訪治男(足利銀行)両氏と、講演会の始まる前の僅かの時間を利用して岩井邸に急いだ。ところがその先生がいつに変わぬ温容で玄関に出てこられたものだから我々は二度びっくりした。お話しによると入院して諸検査を受けられたとのことであるが、岩井さんのいっそうのご健康を祈ります。新島学園は以前の木造校舎からモダンな両面採光の建物になり、グラウンドにはサッカーの練習に励む若人の姿があった。

(三)

同志社新島研究会は、新しい企画として昨年から地方講演会を催すことになり、その最初の開催地として選ばれたのが、新島先生の帰国後の活躍の最初と最後を記念する安中と前橋であった。安中については前記の通りであるが、前橋は、新島先生が「同志社大学設立の旨意」を発表し(明治二十一年・一八八八年)、大学設立のための苛酷な募金運動のため明治二十二年十一月ついに病に倒れられた所である。「いしかねも微れかしとて一筋

に 射る矢にこむる大丈夫の意地」と詠われたのはこの前橋である。私は前橋の講演会には行けなかったが、安中教会では、湯浅安中市長、新藤二郎新島学園校長、井殿牧師ほか約八〇名の熱心な聴衆と共に、同志社女子大学教授武邦保氏による「新島裏とキリスト教―その野心的実践」、同志社大学文学部教授井上勝也氏による「新島裏の教育思想」と題するそれぞれ熱のこもった講演を拝聴して深い感銘をうけた。「同志社タイムス」の三二九号に萩原俊彦氏による詳細なレポートがある。また講演内容は「新島研究」五十九号を参照されたい。講演会終了後、教会教育館で十時まで約一時間、二〇名ばかりが残って熱心なディスカッションがもたれた。筆者が特にインテレストを感じた討論は、一般に新島先生は欧米の文物を求めて脱国し、結果としてキリスト教に帰依して帰国されたように言われているが、井上教授による先生はむしろ脱国前にキリスト教に開眼しており、キリスト教の真理を究めるために危険を敢て冒して脱国されたとの説をめぐってであった。この点の真実性については、武・井上両講師と司会の労をとられた香里高校の萩原教諭は揃って

